

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第176号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成26年6月21日

ホシガラス



2013.12.12 札幌市豊平区

撮影者 北川博一（札幌市東区）



も く じ

石狩湾新港にコケワタガモ	札幌市北区	樋口 孝城	2
珍客カワビタキ、札幌の川に現る	石狩市	渡部 昌樹	3
石狩地方の水田を利用するアオサギの生態			
北海道立総合研究機構 環境科学研究センター	玉田 克巳	4	
北の大地のアカゲラと、南の島のノグチゲラ			
(2) 亜熱帯の森の希少なキツツキ			
森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ	小高 信彦	6	
札幌市および江別市におけるノハラツグミの観察記録			
	札幌市白石区	木村 耕	8
2013年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録 (2013.4~2014.3)			9
平成26年度 総会報告			12
探鳥会 ほうこく			13
探鳥会 あんない			16
鳥民だより			16

石狩湾新港にコケワタガモ

札幌市北区 樋口 孝城

毎冬、石狩湾新港には海鳥を見に月に2,3回は行くのですが、札幌は青空でも新港一帯は吹雪ということがよくあります。2014年1月27日の午前中も例外ではありませんでした。こういう時は車の中からでも見られる東埠頭の漁港内を眺めて、常連のカモ類やカモメ類に挨拶してお終いというのが近年のパターンになってしまいました。

車の中から双眼鏡でシノリガモ10羽近くの群れを見ていたら、その中に見当もつかないカモが1羽いました。普通のカモ類を見るだけのつもりでしたから、図鑑は持っていきませんでした。「このカモは何だ？」少々焦りました。

シノリガモと同じくらいの大きさ、全体的に褐色、灰色のように見える嘴、奇妙な感じの四角い頭、翼にあってよく目立つ2本の白線。時折止む程度の吹雪の中、まずは何とかこれだけを確認しました。幸いコンパクトデジカメは持っていたので、車の中から数枚直撮り。吹雪が止むのを待とうとしていたら、シノリガモの群れとともに海方面に飛んでしまったようで、見当たらなくなりました。

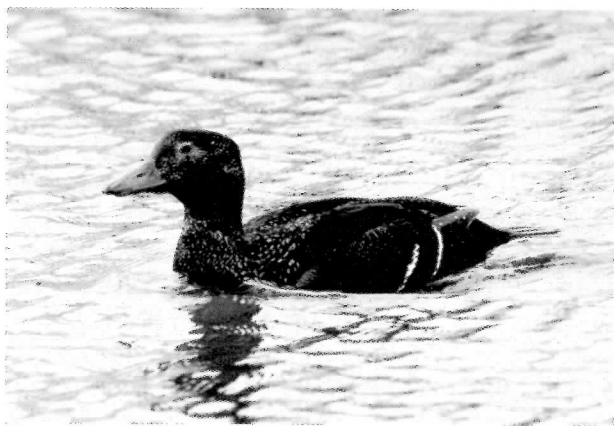
記憶が脳から消去されない前に帰宅して、家人にボケボケ写真を見せながら特徴を話したら、図鑑からコケワタガモの雌を見つけ出してくれました。何といっても翼の2本の白線が最大の決め手でした。わかってホッとするとともに、こりゃ珍しいということで愛護会HPの野鳥情報伝言板にアップしました。

海の方に飛んで行ったのが戻ってきたのか、それとも実は飛んで行かずに船の陰にでもいたのか、私が帰った後、昼ごろに同個体を見て、きれいな写真を撮った人がいました。伝言板を見たということで、その人から連絡があった

のですが、開設者不明のブログに1月18日付けで、おそらく同個体とみなされる写真が載っているとのこと。早速見てみたらちゃんと載っていました。私が初めて見た日より10日近く前にはもう来ていたようです。

すぐいなくなるかと思っていたら随分と長居しました。見に行った人たちの話では、2月28日まではいたとのこと。およそ40日間の滞在でした。その間、だいたいはシノリガモ、時にはスズガモとともに行動していたようです。3月に入るとシノリガモも見られなくなったことから、一緒に北の方に旅立ったのかもしれませんが。

過去の記録をひもとくと、1998年2月22, 23日に小樽高島漁港で雄というのがありました(北海道野鳥だより113, 1998)。日本海側では16年振りの記録です。次に来る時には雌雄揃ってというのは贅沢な望みでしょうか。



コケワタガモ雌 2014. 2. 1 北川博一さん提供

珍客カワビタキ、札幌の川に現る

石狩市 渡部 昌樹

アマチュアカメラマンとしては人生同様に、行き当たりばったり、ずぼら、横着、いい加減、意志薄弱な自分ですが、それが幸いしてか1年の間に二度も珍鳥と言われる野鳥に出会うことが出来ました。一度目は昨年春、前田森林公園でのコウライウグイスとの出会い、そしてこの度のカワビタキです。

2014年1月8日、正月ボケの解消がてらに車を走らせ、比較的近場のいつもの野鳥観察スポットを覗いたもののまったくのハズレ。「今日はボウズか」と観念しつつ「もう一カ所だけ」と思って札幌大橋たもとの撮影ポイントへ急行。撮影の狙いは、北海道らしい雪の中にカワセミのいる風景でした。

この場所、札幌市側から進んで、石狩川に架かる札幌大橋のたもを右折し、堤防に沿ってヤツメウナギ漁師さんのトラック用の細い道をほんの少し進むと川べりに着けます。地名は札幌市北区篠路町拓北です。いつもなら誰か彼か先着組がいる場所なのに、この日に限って無人。これで独占状態でカワセミを狙えると口元を緩めたその視線の先に何か黒っぽいものがちょろちょろしているではないですか。明らかにカワセミではなく、最初はカワガラスかなと思いましたが大きさが違います。少しして日向に出てきたその姿を見てびっくりです。ずぼらな自分でも地元新聞社が発行する野鳥の本程度は見えますが、それには載っていない、無論初めて見る「青い鳥」です。それもカワセミのようなメタリックなブルーではなく、印刷インクで言えばつや消しのブルーで、光線の加減で黒青色にも見えます。大きさはスズメほど。オレンジがかった赤色の尾が鮮やかです。これがカワビタキとの最初の出会でした。

帰宅してからネットで「青い鳥」を検索しても名前は不明のまま。仕方なくコウライウグイスの時にもお世話になった日本野鳥の会札幌支部に問い合わせ、「青い鳥」の正体がカワビタキと分かったのです。万に一つの幸運に野鳥の神様に感謝したものでした。

同所には通算10回程度通いましたが、その間、実際に姿を見せてくれたのは4、5回ほど。しかもほぼすべてが午後2時前後です。1回の出現時間は2、3分ほどで、あっという間にどこかへ飛んでいきます。残念なのはカワビタキが止まるのはほとんど水際で、こちらの狙う雪を背景とした木止まりというシチュエーションはほとんどありませんでした。「カワ」の名前が付くだけあって、水際が好きなのでしょうか。そうしているうちに2月下旬にはまったく姿を見ることがなくなりました。

野鳥についてはほとんど素人の自分が言うのはおこがましいですが、最後に出現場所および観察記録等について想

像を交え若干申し述べます。この場所は石狩川の本流がおそらく堆積物によって新たに流れを作った支流状の細い川で、川幅は狭いところで10mほど。近くにある下水処理場から温かい放流水が流れ込むため、冬でも川は凍結せず小魚もいるのでカワセミなど魚を捕食する鳥には絶好の場所と思われます。カワビタキはこの川の対岸の茂みにもぐりこみ、そこに残っていたと思われるオレンジ色をした小さな木の実をついばんでいました。雪は多いものの茂みはすだれ状の細い枝でできており、真冬でも空洞を維持し、小さな鳥であれば十分にもぐりこむことが出来ます。



カワビタキ 2014. 1. 25 札幌市北区篠路町拓北

2月ごろにはツグミもこの茂みにもぐりこみ同じものを食べていたようです。そのためカワビタキも餌を失い、この場所に居られなくなったと推察しています。カワビタキはおそらくこの茂みを餌場とし、下水処理場の放水を調節する樋門（管）を寒さしのぎのねぐらにして行き来していたはず。出現したときには茂みと樋門の間の放水路（70～80m）を行き来しているのを何度か観察しました。

カワビタキはヒマラヤにも生息していると聞きます。そのヒマラヤには有名な「ヒマラヤの青いケシ」という花があります。そこで自分は勝手に、遭遇したカワビタキを「ヒマラヤの青い鳥」と名づけています。今はこの「ヒマラヤの青い鳥」が無事、元居た場所に戻ってくれることを願わずにいられません。まさに一期一会に感謝です。

[広報部注] カワビタキは中国や台湾などの留鳥です。日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会 2012）には採用されていなく、検討中の種となっています。これまで日本では山口県、栃木県、東京都で記録があります。ただ、東京都の記録は籠抜けとされているようです。今回の個体については、断定困難ですが、山口、栃木と同じく迷行による飛来・滞在であろうとみなされます。

石狩地方の水田を利用するアオサギの生態

北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳

ななつぼし、ゆめぴりか、おぼろづき。知事自らがCMに出演して推し進めた米チェンのキャンペーンの効果もあって、今や道産米は、おいしさでも他と引けを取らぬブランド米に成長しています。開拓の時代には、稲作に向かない地域として、北海道開拓使は米作を奨励しませんでした。それでも米を作りたいという農家たちは、赤毛米や直播など、品種や農法で寒冷地対策に挑んできました。稲作の歴史は浅い北海道ですが、今では作付面積も生産量も新潟県と並んで全国で一、二を争う米所になっています。また北海道は、日本の食料基地であり、農業は大事な基幹産業ですが、その形態は、地域によって大きな特徴があります。道東や道北は酪農、十勝や網走は畑作、そして石狩、空知、上川は稲作農業が中心となっており、石狩川流域には広大な水田が広がっています。

さて、北海道にはコサギやダイサギなどのいわゆる白鷺は少なく、サギ類といえばアオサギが代表的です。河川、湖沼、海岸にはもちろん普通に生息していますが、水田でもよく見かけます。ではアオサギは水田で何をしているのか、少し調べる機会がありました。ここでは、アオサギが水田をどのように利用しているのかを紹介します。

水田、畑地、河川などが混在する当別町と新篠津村の農業地域に、3カ所のルートを設定し、合計81kmを2009年4月から12月まで毎月上中旬に1回ずつ車で低速走行してアオサギを数えました。また、周辺に点在する湖沼（越後沼、しのつ湖、大沼、宝水沼）でも調査地点を決めてカウントしました。結果を図1に示します。4月には、湖沼では普通に見られたアオサギが、水田では全く観察されま

せんでした。5月に入って水田を湛水してもアオサギはわずかに見られるだけでしたが、6月に田植えが終わるころから個体数が増えました。そして7月下旬にもっとも多くなり、その後減少して中干しのはじまる8月下旬からまたアオサギは見られなくなります。一方湖沼では、水田で数が増え始める6月ごろから観察数が減少しますが、7月から徐々に増加して、9月中旬ごろまで多く見られました。紙面の都合で図は割愛しますが、河川でも、湖沼と同様の傾向が見られました。また畑地では通年ほとんど見られませんが、8～9月にわずかに観察されました。個体識別はしていないので、個々のアオサギの行動はわかりませんが、おそらく4～5月は湖沼や河川を利用し、6～8月に水田を利用するようになるために、湖沼や河川で観察数が減るのだと思われます。

では、アオサギはなぜ水田を利用するのでしょうか。水と関係していそうですが、5月に水田を湛水しても数が増えないことをみると、水だけでは説明ができません。このことを調べるためにアオサギの採餌行動を観察しました。カウントとは別の日に、この調査地に赴き、水田と湖沼で採餌体制に入っているアオサギを探して、望遠鏡を使って何を食べているのかを調べました。さすがに38倍の望遠鏡でも、食べている魚の種までは同定できませんが、およその大きさと、いわゆる紡錘形をした魚、ドジョウ、カエル、オタマジャクシなどのカテゴリー程度の識別はできました。結果を表1に示します。湖沼ではほとんどが小さな魚で、時々大きなフナも食べていました。餌を獲ろうと思っても、必ず捕獲できるわけではなく、成功率は60～70%でした。1匹の餌を食べてから、次の餌をとるまでの平均時間も5～10分程度でした。では水田ではどうでしょうか。水田をよく利用する6月中旬から8月上旬に食べていたものは、ほとんどがオタマジャクシでした。成功率は98%で高く、餌をとる平均時間は0.4分(25秒)で、早いときには採餌間隔は10秒程度で、獲っては食べ、獲っては食べという状態でした。このほか観察例はわずか1例でしたが6月上旬の水田ではドジョウを食べていました。

田んぼにおけるオタマジャクシの発生状況についても調べてみました。調査地内にある3カ所の田んぼの畦に合計3,365mの調査路を設定し、日中に歩きながらオタマジャクシとカエルを数えてみました。観察できたカエルは合計で4,118匹でしたが、ほとんどがニホンアマガエルで、エゾアカガエルは2匹だけでした。オタマジャクシとカエルの観察状況を図2に示します。オタマジャクシは6月中旬から観察されはじめ、6月下旬に急増します。7月上旬にはいったん減りますが、7月中旬にまた増加して、7月下

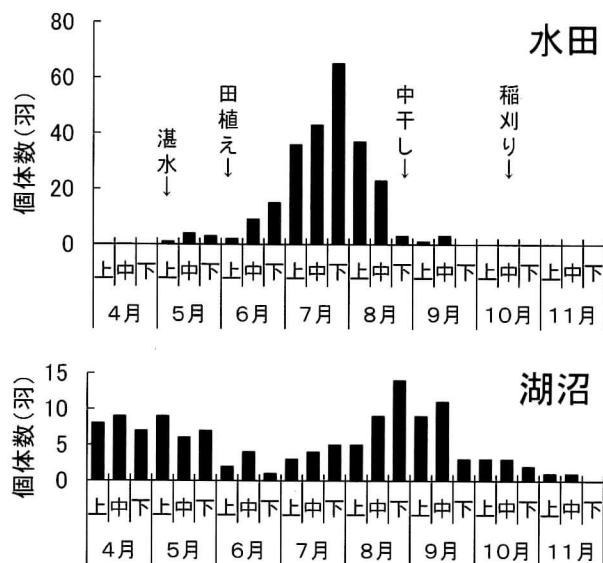


図1. 水田と湖沼で観察されたアオサギの個体数変化

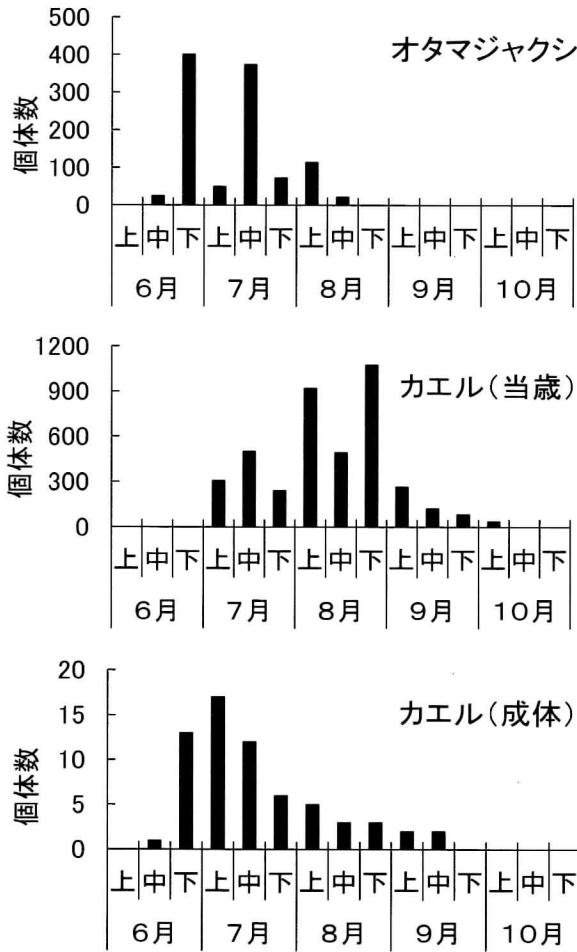


図2. 水田におけるオタマジャクシとカエル類の発生状況

旬に減少し、変動を繰り返しました。オタマジャクシから変態した当歳のカエルは7月上旬から見られるようになり、多少の変動はありますが、8月下旬までに徐々に増加します。

水田は5月上旬に湛水し、代かきがはじまりますが、このころは、まだオタマジャクシがいないので、アオサギもあまり田んぼに姿を見せません。ニホンアマガエルの卵は、エゾアカガエルのような巨大なゼリー状の卵塊を産むわけではなく、水際の植物に目立たない白っぽい卵を産みつけ

ます。今回の調査では卵まで調べることはできませんでしたが、6月上旬に田植えがはじまると、ニホンアマガエルの産卵がはじまるものと思われます。またエゾアカガエルの産卵期間は一般的に4月の短い期間に集中しますが、ニホンアマガエルは長期間にわたって断続的に産卵します。4月には、田んぼは湛水していないので、エゾアカガエルがほとんどいないのだと思われます。今回の観察で6月下旬から7月上旬にオタマジャクシが減ったのは、オタマジャクシがカエルに変態したからです。8月下旬ごろまで、当歳のカエルは徐々に増加します。7月下旬に向かって田んぼのオタマジャクシの増加するのを追いかけるように、アオサギの個体数も増えます。アオサギはカエルも食べますが、オタマジャクシがカエルへの変態が進むにつれて、徐々に田んぼからいなくなり、8月下旬に田んぼの中干しがはじまり、カエルが減ると、アオサギも少なくなります。そして稲刈りのある10月中旬にはカエルが田んぼから姿を消し、アオサギも見られなくなりました。このように、石狩地方のアオサギは、ニホンアマガエルのオタマジャクシを餌とするために、田んぼと湖沼（あるいは河川）を巧みに使い分けているのだと思われます。

では、この時期はアオサギにとって、どのような時期であるか、考えてみましょう。北海道のアオサギは、ごく一部は越冬しますが、ほとんどの個体が夏鳥として3月中旬ごろに渡ってきます。そして、4月上旬から抱卵し、5月上旬に孵化して、7月上旬までには雛を巣立ちさせます。水田を利用しはじめる6月中旬は、ちょうど巣内の雛が大きくなる育雛中期に相当し、アオサギが田んぼをよく利用する8月中旬ごろまでは、巣立ちした雛が独立する時期に相当します。水田のオタマジャクシは次々と発生し、しかも簡単に採餌できる餌です。石狩地方のアオサギにとってオタマジャクシは、子育てのための重要な餌資源になっているのだと考えられます。

この原稿は以下の研究論文を概説したものです。

TAMADA K. (2012) Seasonal change in habitat use by Grey Herons in a rural area of western Hokkaido. Ornithological Science 11:95-102.

表1. 採餌頻度と採餌動物

		水田		湖沼		
		6月上旬	6月中旬 8月中旬	4月上旬 6月上旬	6月中旬 8月中旬	8月下旬 9月下旬
観察時間(分)	a	61	158	497	299	327
観察個体数		1	12	19	8	6
採餌を試みた回数	b	11	391	147	60	45
うち成功した回数	c	7	382	96	42	28
成功率(%)	c/b×100	64	98	65	70	62
採餌1回の平均時間(分)		9.0	0.4	4.2	5.3	8.2
採餌動物						
魚1(10cm未満)		2 (29 %)	0 (0 %)	49 (51 %)	22 (52 %)	9 (32 %)
魚2(10cm以上)		0 (0 %)	0 (0 %)	22 (23 %)	8 (19 %)	6 (21 %)
魚3(ドジョウ類)		5 (71 %)	9 (2 %)	1 (1 %)	2 (5 %)	0 (0 %)
カエル類		0 (0 %)	3 (1 %)	0 (0 %)	0 (0 %)	0 (0 %)
オタマジャクシ		0 (0 %)	325 (85 %)	0 (0 %)	1 (2 %)	0 (0 %)
エビ類		0 (0 %)	0 (0 %)	0 (0 %)	1 (2 %)	0 (0 %)
トンボ類		0 (0 %)	0 (0 %)	0 (0 %)	0 (0 %)	11 (39 %)
不明		0 (0 %)	45 (12 %)	24 (25 %)	8 (19 %)	2 (7 %)

北の大地のアカゲラと、南の島のノグチゲラ

(2) 亜熱帯の森の希少なキツツキ

森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ 小 高 信 彦

前号の北大キャンパスに暮らすアカゲラの研究紹介に引き続き、今回は南の島のキツツキ、ノグチゲラの研究について紹介させていただきます。

ノグチゲラが暮らす亜熱帯性常緑広葉樹林やんばるの森は、沖縄県の県庁所在地である那覇市のある沖縄島にあります。世界自然遺産の候補地となっている奄美・琉球諸島の中でも最大の島である沖縄島は、南北に長く、那覇空港から約100km北上した島の最北部にやんばるの森が広がっています。人口30万人を超える都市である那覇市と地続きにノグチゲラや、1981年になって発見されたヤンバルクイナなどの島の固有鳥類、それに日本最大の甲虫ヤンバルテナガコガネなどが絶滅を免れてこれまで生き延びてきたことには、奇跡と言ってもよい驚きを感じます。ノグチゲラは沖縄島北部の南北わずか数十キロの範囲に広がるやんばるの森だけに生息する、世界で最も分布域の狭いキツツキの一つです。

やんばるの春の訪れはとても早いです。沖縄島最北部の奥气象台の平年値によると、年平均気温20.7度、年降水量2501.5mmとなっています。札幌が雪まつりでにぎわう2月の奥の平均気温は14.6度で、この季節にはすでに桜（カンヒザクラ）が満開を迎えます。北海道に住んでいた頃は、春が近づくにつれウグイスやメジロの初鳴きを楽しみにしていたものですが、やんばるの森では晴れた日には1月か



写真1. 樹木に着生するオオタニワタリ。鳥の巣に形が似ており、トリノスシダなどと呼ばれ、実際にリュウキュウキタビタキやフクロウ類が巣場所として利用することがある（国頭村2月）

らこれらの小鳥がさえずっています。やんばるの森には北海道の感覚で言うところの「冬」は無いと言ってもよいでしょう。イタジイ（スダジイ）が優占するやんばるの森に一步踏み入ると、樹高15mにもなる木性シダであるヒカゲヘゴや、樹木に着生するオオタニワタリ（写真1）など、大型のシダ類が繁茂した太古の森を思わせる風景に出会うことができます。



写真2. 巣口のノグチゲラメス 樹上自動撮影カメラで撮影（国頭村3月）

ノグチゲラは（写真2）、前回紹介したアカゲラの一妻二夫の論文が掲載されたIBIS誌に、さかのぼること111年前の1887年、イギリスのシーボームさんによって新種として世界に紹介されました。1887年（明治20年）といえば、サッポロビールの前身の日本麦酒醸造会社が設立された年で、エビスビールのラベルには1887年と書かれています。私はエビスビールのラベルの年号をみるたびに、ノグチゲラが新種記載された年だな、と心の中でささやいています。ノグチゲラは、少し変わった名前です。新種記載をしたシーボームさんに日本からノグチゲラの標本を送ったプライヤーさんが、「ノグチに献名するように」との手紙を添えていたことから、学名にノグチが付き、ノグチゲラと呼ばれるようになりました。このノグチは、正体不明の謎の採集人とされることが多かったのですが、北海道大学植物園の加藤克さんらの研究では、長崎のオランダ坂付近の出身で、1800年代後半に横浜や函館で通訳として活躍していた野口源之助さんではないか、という説が提案されています。いっぽう、横浜郷土歴史家の三浦清さんは、ノグチはプライヤーの内妻の苗字で、その名前を新種のキツツキ

に献名したのではないかと、との説を提案されています。タイムマシンがあったら、明治に戻って創業当時のエビスビールを飲みながら、プライヤーさんとノグチゲラ談義をしつつ真相を伺いたいところです。

ノグチゲラの分類については、新種記載以来、約120年に渡って様々な議論が行われてきました。ノグチゲラは1887年、新種*Picus noguchii*として発表されました。現在ヤマゲラやアオゲラが含まれるアオゲラ属をさす*Picus*属には、当時はより広いキツツキ科の鳥類が含まれていたようで、アカゲラ*Dendrocopos major*も*Picus*属に含まれていたようです。同じ1887年スタイネガーさんは東南アジアに分布する、ノグチゲラと羽色がよく似たヤブゲラやエビチャゲラが含まれる*Blythipicus*属にノグチゲラを分類しました。その3年後ハーギットさんがノグチゲラの独特の羽色から、*Sapheopipo noguchii*として一属一種説を提案しました。その後、グッドウィンさんは1968年に翼の白斑のパターンなどから、ノグチゲラとアカゲラ属キツツキの類似点を指摘し、1972年にはグジさんも胴体部の解剖学的な特徴からは、アカゲラ属のキツツキとノグチゲラに相違点を見いだせなかったことを報告しています。しかし、木目調の美しい世界のキツツキ図鑑を執筆したアメリカのショートさんは、やんばるの森にも実際に訪れノグチゲラの観察を行い、地上付近で採餌する行動やその色彩から、ヤマゲラやアオゲラに含まれる*Picus*属や、エビチャゲラに含まれる*Blythipicus*属と比較的近い、古い系統のキツツキであるとし、ノグチゲラの一属一種説を支持しこれが定説となっていました。

1999年3月に初めて行われた当時の環境庁によるノグチゲラの捕獲標識調査で最初に捕獲したノグチゲラを私が触った印象は、アカゲラ属のキツツキでした。その後、アカゲラが美しく描かれた表紙の世界のキツツキ図鑑を執筆された、ウィーンのコンラートローレンツ研究所のウィンクラーさんとの共同研究で、エビチャゲラなどこれまでノグチゲラとの類縁関係が議論されてきた世界のキツツキとノグチゲラの系統関係についてDNAを用いて分析しようということになりました。分析の結果、ノグチゲラはこれまでに議論されてきた*Blythipicus*属や*Picus*属とはかなり縁遠く、オオアカゲラやアカゲラと近縁でアカゲラ属に含まれることが明らかとなりました。世界のキツツキの中でも最も広い分布域を持つアカゲラと、最も狭い分布域を持つノグチゲラ。実は、おそらく100万年ほど前に共通祖先をもつ、近縁種であることがわかりました。旧北区のヨーロッパからアジアまで分布し、世界の様々な環境に適応し、人里近くにも姿を見せて呉れるアカゲラも見事なものです。が、気候変動など様々な大きな環境変化の影響を受けながらも、小さな島で長い年月命をつないできたであろうノグチゲラも素晴らしいとしか言いようがありません。

それにしても、ノグチゲラの姿は、他のアカゲラ属のキツツキとは一目でわかるほどかけ離れています。また、アカゲラ属の他のキツツキは時折地面付近に降りることはあ

るものの、もっぱら樹上で採餌を行い、ノグチゲラのように土を掘ってくちばしを泥だらけにしながらセミの幼虫やキムラゴモのような地中性のクモを主要な餌として捕まえて食べる行動は報告されていません。アリ類を主要な餌としているアオゲラ属のキツツキなどでは、地上に降りて採餌する種がよく知られています。しかし、ノグチゲラはアリを主食としないアカゲラ属に近縁であるにもかかわらず、なぜ地上に降りて餌をとるようになったのでしょうか？この答えの一つとして、やんばるの森は島の森で、従来、捕食性の哺乳類が生息せず、このため地上に安全な採餌環境があったことが考えられます。日本で唯一の飛べない野生の鳥、ヤンバルクイナが生息することからも、やんばるの森の地上が安全な環境であることが分かります。また、小さな島ではアオゲラなど他の地中の餌をめぐる競争者が少なかったことも、ノグチゲラの地上採餌への適応を促したと考えられます。ノグチゲラの褐色の羽色は、やんばるの林床の色によく溶け込み、ハシブトガラスやツミなど、空からの捕食者に対して保護色となっているようです。もう一つ興味深いのは、BSプレミアムの番組でも紹介されていたように、土掘りのほとんどをオスが行うということです（写真3）。巣に餌を運ぶ親鳥のくちばしに着目して調



写真3. 林床のノグチゲラオス 地上自動撮影カメラで撮影（国頭村3月）

べてみると、オスでは餌運びの半分から多い巣では70%程度、餌をくわえたくちばしに泥がべったりと付着しています。いっぽう、メスではそのようなことがほとんどありません。餌場や餌の種類に雌雄で大きな違いがあれば、狭い範囲で暮らしている雌雄間での餌資源をめぐる間接的な競争が緩和されます。このような餌場の雌雄差は狭い島環境で生きぬく上での重要な仕組みの一つと考えられます。そろそろ紙面がなくなってきました。環境省による標識調査によって、ノグチゲラは一度つがいになると相手がいなくなる限り同じペアで繁殖を続け、長いものでは11年もつがい関係が継続した例が観察されています。夫婦仲が続くのも、狭い空間で雌雄がうまく資源を分け合って暮らすことができるからなのかもしれません。まだまだノグチゲラについて書きたいことが山ほどあるのですが、続きはまたの機会に。

札幌市および江別市におけるノハラツグミの観察記録

札幌市白石区 木 村 耕

ノハラツグミ *Turdus pilaris* はスカンジナビア半島からバイカル湖周辺の高緯度地域で繁殖し、冬季はユーラシア大陸西部一帯で越冬するツグミ科の鳥です。日本においては迷鳥とされており、北海道では冬季～春季にかけて10例前後の記録があります。近年は国内の記録も増えてきている中、2014年2月、北海道札幌市および江別市において2個体のノハラツグミを観察しましたので、ここに報告させていただきます。また札幌市にお住まいの方から同年同月にノハラツグミ1個体を観察した旨ご連絡いただきましたので、併せて紹介いたします。

1 個体目 (2014年2月2日、札幌市白石区南郷)

2月2日午前9時30分頃、札幌市白石区南郷の市街地に植栽されたナナカマドにて、60羽前後のツグミに混ざって採餌していました。遠くからでも青灰色の頭と黄色い嘴、喉から胸にかけてのオレンジ色と黒斑、茶色の背中などが確認でき、一目でノハラツグミであると確信しました。その後に至近距離でも観察できましたが、外側大雨覆6枚が短く、先端に薄いパフ色の斑があるなど幼羽の特徴が確認できたため、第一回冬羽と判断しました。

同個体を確認したのは2月2日と2月6日のみで、7日には周辺のナナカマドの実がほぼ食べつくされてしまったため、ツグミの群れ共々姿を消しました。しかし2月8日にそこから1kmほど離れた白石区本通にて、上空を通過する多数のツグミの中に1羽のノハラツグミを確認しています。下雨覆が白いこと、腰が青灰色であることを確認したため間違いはないですが、2日に発見した個体と同一かは不明です。



ノハラツグミ 2014. 2. 2 札幌市白石区南郷

2 個体目 (2014年2月15日、江別市野幌)

2月15日午前8時45分頃、江別市野幌町の住宅街に植栽されたナナカマドにて、100羽前後のツグミに混ざって採餌していました。同定根拠は南郷個体と同様です。この個体は大雨覆がすべて成羽であり、成長冬羽と判断しました。年齢が異なるため南郷個体とは別であるのは明らかですが、他にオレンジ色が喉まで広がらずに胸に限定されること、胸の黒斑が太く密であることなどが異なります。

同個体を確認したのは2月15日および16日の2日間のみで、翌週には姿を消していました。15日の時点で樹上のナナカマドはほぼ食べ尽くされており、ツグミの群れは周囲の地面に散乱した実を食べているような状況でした。16日から17日にかけて数cmの積雪があったため、採餌が困難になり移動したのではないかと推測します。

3 個体目 (2014年2月18日および3月6日、札幌市円山)

札幌市在住の長谷川則子さんからご連絡をいただき、写真を拝見したところ、青灰色の頭や茶色の背、薄くオレンジ色の乗った胸などが鮮明に写っており、間違いなくノハラツグミであることを確認しました。また大雨覆のうち外側の少なくとも5枚が幼羽の特徴を持っており、第一回冬羽と考えられます。同じ第一回冬羽である南郷個体とは、オレンジ色が喉にかからず胸に限定されること、胸の黒斑が太く密であることなどが異なり、撮影時期のずれはあるものの1ヶ月で考えられる変化の範疇を超えていると考え、別個体と推測しました。

この個体は沢沿いの積雪のない地面で、10羽前後のツグミとともに採餌していたそうです。2月18日の個体と3月6日の個体が同一であるかは不明ですが、観察された場所が同じであること、迷鳥であることなどを考えると、同一である可能性が高いように思われます。

今回観察された3個体の共通点として、ツグミの群れに混ざって採餌していたことが挙げられます。また筆者が発見した2個体はいずれも、街路樹のナナカマドを採餌場所にしていました。北海道では幹線道路や住宅街にナナカマドが植栽されていることが多く、鳥類にとっては冬季の重要な餌資源になっていると考えられます。特にツグミは、年に年変動はあるものの毎年必ず多数の個体が観察できます。こういった観察環境が整っている北海道では、ノハラツグミに限らず、迷鳥とされている大型ツグミ類の記録がこれから増えていくのではないかと、筆者は考えています。多くの記録が積み重なれば、迷鳥とされている鳥でも日本国内での動態が明らかになってきます。今回の観察記録がその一助となれば幸いです。

2013年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録 (2013.4~2014.3)

科・種名	探鳥地	野幌森林公園	宮島沼	モエレ沼	野幌森林公園	千歳川	鵠川河口	野幌森林公園	植苗ウトナイ	厚別川	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鵠川河口	野幌森林公園	いしかり調整池	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	円山公園	記録回数	
		月	4	4	4	5	5	5	6	6	6	6	6	7	8	8	9	9	9	10	11	12	1	2		3
		日	14	21	28	12	19	26	1	2	9	16	30	14	18	25	8	15	29	13	3	8	19	2		2
カモ科																										
ヒシクイ		●																						1		
マガン		●																●						2		
コハクチョウ		●																						1		
オオハクチョウ		●																						1		
オシドリ					●	●																		2		
ヨシガモ		●	●																					2		
ヒドリガモ		●	●															●						3		
マガモ		●	●	●	●	●		●		●			●	●		●	●	●	●		●			14		
カルガモ		●		●		●		●						●	●		●	●						6		
ハシビロガモ																	●	●						2		
オナガガモ		●															●	●						3		
コガモ		●	●														●	●		●	●			6		
キンクロハジロ		●	●														●	●		●		●		3		
スズガモ																					●			1		
シノリガモ																					●			1		
ビロードキンクロ																					●			1		
ホオジロガモ																					●			1		
ミコアイサ		●	●																			●		2		
カワアイサ		●	●			●																		3		
ウミアイサ																						●		1		
カイツブリ科																										
カイツブリ		●																●	●					3		
アカエリカイツブリ																					●			1		
カンムリカイツブリ																					●			1		
ミミカイツブリ																					●			1		
ハジロカイツブリ																		●			●			2		
ハト科																										
キジバト		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●						14		
アオバト							●			●			●		●									4		
アビ科																										
オオハム																						●		1		
ウ科																						●		1		
ヒメウ																						●		1		
カワウ			●									●			●							●		3		
ウミウ						●								●	●							●		4		
サギ科																										
アオサギ		●	●			●		●	●		●			●	●	●	●	●						11		
ダイサギ			●												●		●							3		
チュウサギ			●														●							2		
クイナ科																										
バン																		●						1		
オオバン			●																					1		
カッコウ科																										
ツツドリ				●			●			●			●											4		
カッコウ								●	●	●	●	●												4		
チドリ科																										
コチドリ									●								●							2		
シギ科																										
ヤマシギ							●																	1		
オオジシギ								●																1		
オグロシギ									●															1		
チュウシャクシギ						●											●							1		
ツルシギ																	●							1		
アオアシシギ																	●							2		
キアシシギ							●										●							1		
イソシギ					●	●			●					●	●									5		
トウネン														●			●							2		
ハマシギ														●			●							2		
エリマキシギ																	●							1		
カモメ科																	●									
ユリカモメ		●																						1		

科・種名	探鳥地	野幌森林公園	宮島沼	モエレ沼	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	野幌森林公園	植苗ウトナイ	厚別川	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鶴川河口	野幌森林公園	いしかり調整池	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	円山公園	記録回数
	月	4	4	4	5	5	5	6	6	6	6	7	8	8	9	9	9	9	10	11	12	1	2	3	
	日	14	21	28	12	19	26	1	2	9	16	30	14	18	25	8	15	29	13	3	8	19	2	2	
ウミネコ														●	●									2	
カモメ		●	●																					2	
ワシカモメ																					●			1	
シロカモメ							●														●			2	
セグロカモメ																					●			1	
オオセグロカモメ			●				●				●		●	●							●			6	
ウミスズメ科																									
ハシブトウミガラス																					●			1	
ウミガラス																					●			1	
ケイマフリ																					●			1	
ミサゴ科																									
ミサゴ						●	●																	2	
タカ科																									
トビ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●	●		●		●	●	●	●	20	
オジロワシ			●						●												●			3	
オオワシ																					●			1	
チュウビ									●						●									2	
ハイタカ		●		●		●				●											●			5	
オオタカ																		●				●		2	
ノスリ			●																					1	
フクロウ科																									
フクロウ											●													1	
カワセミ科																									
カワセミ					●	●											●							3	
キツツキ科																									
アリスイ			●							●														2	
コゲラ		●			●	●		●			●		●			●			●	●	●		●	12	
オオアカゲラ		●														●			●	●	●		●	5	
アカゲラ		●		●	●	●		●		●	●	●	●			●			●	●	●		●	15	
クマゲラ						●														●				2	
ヤマゲラ		●			●	●														●	●		●	7	
モズ科																									
モズ			●		●	●				●					●			●						6	
カラス科																									
カケス										●										●	●		●	4	
ハシボソガラス		●	●	●		●	●		●	●	●	●		●	●					●		●	●	15	
ハシブトガラス		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●		●	●	●	●	●	●	20	
キクイタダキ科																									
キクイタダキ		●																						1	
シジュウカラ科																									
ハシブトガラ		●			●					●						●		●		●	●		●	9	
ヤマガラ		●			●	●				●						●			●	●	●		●	10	
ヒガラ		●			●	●													●	●	●		●	8	
シジュウカラ		●			●	●		●		●	●					●		●	●	●	●	●	●	14	
ヒバリ科																									
ヒバリ			●				●		●	●		●		●	●			●						8	
ツバメ科																									
ショウドウツバメ							●					●		●	●									4	
イワツバメ						●																		1	
ヒヨドリ科																									
ヒヨドリ		●		●	●	●		●	●	●	●		●							●	●	●	●	14	
ウグイス科																									
ウグイス					●	●		●	●		●	●	●											7	
ヤブサメ					●	●		●	●		●		●											6	
エナガ科																									
エナガ																			●			●		2	
ムシクイ科																									
エゾムシクイ						●																		1	
センダイムシクイ					●	●		●	●		●		●											6	
メジロ科																									
メジロ																			●					1	
センニュウ科																									
マキノセンニュウ							●		●															2	
シマセンニュウ												●												1	

科・種名	探鳥地	野幌森林公園	宮島沼	モエレ沼	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	野幌森林公園	植苗ウトナイ	厚別川	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鶴川河口	野幌森林公園	いしかり調整池	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	円山公園	記録回数
	月日	4/14	4/21	4/28	5/12	5/19	5/26	6/1	6/2	6/9	6/16	6/30	7/14	8/18	8/25	9/8	9/15	9/29	10/13	11/3	12/8	1/19	2/2	3/2	
エゾセンニュウ										●		●			●										3
ヨシキリ科																									
オオヨシキリ										●		●													2
コヨシキリ							●		●	●		●			●										5
レンジャク科																									
キレンジャク																					●				1
ヒレンジャク																					●				1
ゴジュウカラ科																									
ゴジュウカラ		●			●	●							●			●			●	●	●		●	●	10
キバシリ科																									
キバシリ		●				●							●						●	●	●		●		7
ミソサザイ科																									
ミソサザイ					●																		●		2
ムクドリ科																									
ムクドリ			●				●			●					●			●				●			6
コムクドリ										●		●													2
カワガラス科																									
カワガラス							●																		1
ヒタキ科																									
トラツグミ		●																							1
クロツグミ					●	●		●	●	●			●												6
マミチャジナイ																			●						1
アカハラ						●																			1
ツグミ																				●	●	●			3
ノゴマ						●																			1
コルリ					●	●		●																	3
ルリビタキ					●	●														●					3
ノビタキ		●				●			●	●		●		●	●										7
コサメビタキ						●			●							●									3
キビタキ					●	●		●	●		●		●												6
オオルリ					●	●			●				●												4
スズメ科																									
ニュウナイスズメ		●			●	●		●				●													5
スズメ						●			●	●		●			●							●			6
セキレイ科																									
キセキレイ						●																			1
ハクセキレイ		●				●	●			●		●			●		●					●			8
ビンズイ									●																1
アトリ科																									
アトリ																							●		1
カワラヒワ		●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●	●			●	●						14
マヒワ																							●		1
ベニマシコ				●		●						●													3
ウソ						●															●		●	●	4
シメ					●																	●			2
イカル						●			●																2
ホオジロ科																									
ホオジロ											●		●												2
ホオアカ						●				●		●		●	●										5
アオジ				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					●	●	●					13
クロジ						●																			1
オオジュリン		●				●			●	●		●		●	●										7
ハト科(外来種)																									
カワラバト(ドバト)										●															1
観察種類数		18	32	24	32	46	27	19	28	31	22	27	18	15	28	11	18	22	17	21	19	32	20	14	
参加者数		33	25	27	27	39	38	23	24	37	25	34	26	10	28	25	24	37	31	23	24	41	28	37	666

※1 探鳥会(宿泊探鳥会を除く。)は26回予定し、23回実施。悪天候等により藤ノ沢(5月6日)、ウトナイ湖(11月10日、3月23日)は中止しました。

※2 探鳥会で観察された鳥は42科138種(前年度:43科134種)

※3 年間延べ参加者数は666人、平均29.0人/回(前年度:延べ774人、平均32.3人/回)

平成26年度 総 会 報 告

日 時：平成26年4月9日(水) 18時30分～20時00分

場 所：かでる2・7 110会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に白澤昌彦氏を選出した。議案審議のうえ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成25年度事業報告

〔総 務〕

(1) 野鳥写真展の開催

期 間：平成25年5月13日(月)～5月24日(金)

場 所：札幌市男女共同参画センター(北8西3)

エルプラザ4階 多目的スペース

出 展：26名 50点

(2) 「北海道野鳥だより」の発送(172号～175号)

(3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

期 間：平成25年6月1日(土)～6月30日(日)

出 展：26名 43点

(4) 新年講演会・野鳥写真映写会の開催

日 時：平成26年1月11日(土)13時30分～16時30分

場 所：エルプラザ 4階大研修室

講 師：新田啓子氏(NPO法人真駒内芸術の森緑の
回廊基金・日本オシドリ研究会)

演 題：「札幌におけるオシドリの繁殖」

参加者：58名(野鳥写真提供者3名)

前会長(故)谷口一芳氏寄贈の絵画を希望者に頒布。
15,500円の浄財が集まった。

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売

(6) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

〔広 報〕

(1) 「北海道野鳥だより」172号～175号の発行

(2) 北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営

〔探 鳥〕

(1) 探鳥会24回(宿泊探鳥会を含む。)1回平均29.6人

(2) 宿泊探鳥会 平成25年5月3日(金)～5月5日(日) 天売島(羽幌・天売2泊3日)参加者45名

2. 平成25年度決算報告

平成25年度決算書(別掲のとおり)

3. 会計監査報告

村野紀雄、吉中宏太郎監事から適正に処理されている旨の報告があった。

4. 平成26年度事業計画

〔総 務〕

(1) 野鳥写真展の開催

期 間：平成26年5月15日(木)～5月28日(水)

場 所：札幌市男女共同参画センター(北8西3)

エルプラザ4階 多目的スペース

(2) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

期 間：平成26年6月3日(火)～6月29日(日)

(3) 「北海道野鳥だより」の発送(176号～179号)

(4) 新年講演会・野鳥写真映写会の開催

平成27年1月10日(土)予定

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成販売

(6) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

〔広 報〕

(1) 「北海道野鳥だより」176号～179号の発行

(2) 北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営

〔探 鳥〕

(1) 探鳥会の開催27回(宿泊探鳥会を含む。)

(2) 宿泊探鳥会 平成26年5月10日(土)～11日(日) 十勝(1泊2日) 定員45名

5. 平成26年度予算

平成26年度予算書(別掲のとおり)

6. 平成26年度役員人事

栗林宏三幹事が代表幹事に、島田芳郎幹事が広報幹事代表になった。本間康裕会員が広報幹事に加わった。その他若干の異動があった。

顧 問 藤巻 裕蔵

会 長 小堀 煌治

副 会 長 戸津 高保、樋口 孝城、白澤 昌彦

監 事 村野 紀雄、吉中宏太郎

代表幹事 栗林 宏三

幹 事

(総務)◎畑 正輔、岩崎 孝博、品川 睦生、
清水 朋子、竹内 強、辻 雅司、
中正 憲佑、松原 寛直

(会計)◎横山加奈子、浜野チエ子、原 美保

(探鳥)◎坂井 伍一、梅木 賢俊、門村 徳男、
北山 政人、後藤 義民、佐々木 裕、
佐藤ひろみ、田中 陽、富川 徹、
早坂 泰夫、鷺田 善幸

(広報)◎島田 芳郎、川路 則友、白澤 昌彦(兼)、
高橋 良直、武沢 和義、道場 優、
戸津 高保(兼)、樋口 孝城(兼)、本間 康裕、
道川富美子 (◎印は各担当の代表者)

7. その他

会員の高齢化に伴い、新規会員の加入促進等について意見が出された。今後、継続的に検討することとした。

平成25年度 決 算 書

(収入の部)

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
個人会費	520,000	508,000	▲ 12,000	前納、後納を含む。
家族会費	105,000	132,000	27,000	
団体会費	15,000	10,000	▲ 5,000	
事業収入	45,000	41,600	▲ 3,400	講演会参加費、カレンダー売上
雑 収 入	9,451	22,899	13,448	小樽探鳥会余剰金、利息他
寄 付 金	10,000	19,000	9,000	
小 計	704,451	733,499	29,048	
繰 越 金	295,549	295,549	0	
合 計	1,000,000	1,029,048	29,048	

(支出の部)

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
印 刷 費	450,000	469,558	19,558	野鳥だより印刷費
通 信 費	120,000	118,434	▲ 1,566	会報発送費、切手代
会 議 費	45,000	48,700	3,700	幹事会、総会会場費
交 通 費	20,000	16,500	▲ 3,500	発送時交通費
消耗品費	20,000	37,120	17,120	用紙、インク代、封筒他
報 償 費	55,000	55,000	0	事務所費用
傷害保険費	16,000	15,480	▲ 520	保険代
雑 費	10,000	11,050	1,050	香典他
予 備 費	164,000	0	▲ 164,000	
基金積立	100,000	100,000	0	
次年繰越	0	157,206	157,206	次年度への繰越金
合 計	1,000,000	1,029,048	29,048	

平成26年度 予 算 書

(収入の部)

項 目	本年度予算	前年度予算	増 減	備 考
個人会費	510,000	520,000	▲ 10,000	前納、後納を含む。
家族会費	120,000	105,000	15,000	
団体会費	10,000	15,000	▲ 5,000	
事業収入	45,000	45,000	0	講演会参加費、売上金他
雑 収 入	7,794	9,451	▲ 1,657	利息他
寄 付 金	10,000	10,000	0	個人寄付
小 計	702,794	704,451	▲ 1,657	
繰 越 金	157,206	295,549	▲ 138,343	前年度からの繰越金
合 計	860,000	1,000,000	▲ 140,000	

(支出の部)

項 目	本年度予算	前年度予算	増 減	備 考
印 刷 費	435,000	450,000	▲ 15,000	野鳥だより印刷費
通 信 費	130,000	120,000	10,000	発送費、切手代、インク維持
会 議 費	53,000	45,000	8,000	幹事会、総会会場費
交 通 費	20,000	20,000	0	発送時交通費
消耗品費	27,000	20,000	7,000	事務用品他
報 償 費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	14,000	16,000	▲ 2,000	保険代
雑 費	10,000	10,000	0	設備利用料
予 備 費	116,000	164,000	▲ 48,000	
基金積立	0	100,000	▲ 100,000	
合 計	860,000	1,000,000	▲ 140,000	

積立基金特別会計

(25年度収入決算)

項 目	金 額	項 目	金 額
積 立 金	500,000	積 立 金	600,000
一般会計より繰入	100,000	一般会計より繰入	0
合 計	600,000	合 計	600,000

(26年度収入予算)

会 員 数

	22. 4. 1	23. 4. 1	24. 4. 1	25. 4. 1	26. 4. 1
個 人	260	255	256	270	257
家 族	38	39	39	41	43
団 体	3	3	3	3	2



円山公園

2014. 3. 2

東京都江戸川区
関根千代子

東京から札幌へ友達二人での鳥見旅の途中でした。以前から探鳥地として気になっていた円山公園ですが、初めてなので、どこを歩けばよいかと考えていたところ、ちょう

ど北海道野鳥愛護会の探鳥会があると知り、即参加させて頂くことに致しました。

初参加ということで、係の方々には丁寧に声をかけて頂き、大変嬉しく思いました。会えた鳥は、主にキツツキ類、カラ類。鳥合わせでは、ヤマゲラ、アトリ、ウソがいた様ですが、残念ながら私には姿や声の確認はできませんでした。

赤白黒とファッショナブルなアカゲラは、ゆっくり木の幹を上って行き、暫くの間楽しませてくれました。ヒヨドリは関東と比べて色白ですし、私には夏の高原のイメージ

が強いゴジュウカラ、ヒガラ等に平地で会えるのも、やはり北海道ならではの事です。

鳥以外では、この時期はまだ早いと思っていたシマリスが現れたり、エゾリスは目の前に愛らしい姿を見せ、カメラのシャッターを押しながら、思わず「可愛い～」と声が出てしまいました。そしてその時、前方をキタキツネが静かに通り過ぎて行きました。小鳥の声を聞きながら、シマリス、エゾリス、キタキツネに同時に出会えるとは、何と贅沢なことでしょう。

お陰様で、なかなか体験できない雪景色の公園を、青空の下、楽しいひと時を過ごすことができました。皆様の温かいお心遣いに御礼申し上げます。四季折々の魅力いっぱいの北海道。次回の旅も、勿論北海道に決まりです。

解散後、イスカがいたと教えて頂いた前田森林公園へ行きました。広い園内の松に注意しながら歩きましたが、なかなか出会えず、半ば諦めかけていた時、念願のイスカを松の樹上に見つけることができました。7羽の群れ。♂(成鳥・若鳥)♀。独特の交差した嘴も確認。ありがとうございます。

【記録された鳥】トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、アトリ、ウソ

以上14種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、五十嵐加代子、石田卓也、井上公雄、大島 武、奥島憲英、北川博一、児玉 諭、坂井伍一、ジエク・コート、品川睦生、鈴木志津子、関根千代子、武沢和義、田中 陽・雅子、田辺 至、戸津高保、友成清恵、蓮井 肇、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城・陽子、広木朋子、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、村上茂夫、山田甚一、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎

以上37名

【担当幹事】坂井伍一、武沢和義

モ エ レ 沼

2014. 4. 10

札幌市東区 杉本 和矢

モエレ沼公園のガラスのピラミッドに置いてあった「北海道ウォッチングガイド」で知り、初めて参加させていただきました。多くの方の熟練者らしい装備と服装に圧倒されました。初めてお会いする人ばかりでしたが、その装備の恩恵を受け、また鳥の名前を教えながら楽しい観察が出来ました。私には観察と言うよりも観賞かもしれません。良い思いをさせていただき感謝致します。このような活動をなさっている北海道野鳥愛護会の皆様に敬意を表したいと思います。

私はモエレ沼公園の近くに住し、よく「さとらんど」からモエレへと散歩していました。鳥の名前も知らず、鳴き声を聞きながら歩いていました。名前を知っていたらもっと楽しいだろうなと思い、ある教室に入りました。しかし

ながらなかなか覚えられず、区別もつきません。これは経験しかないかなと思い、また出来れば詳しい方々とご一緒出来たらと思っていました。このような機会を知り、参加させて頂き、意識をしなくとも多くを得たかと思っています。今後は肩肘を張らず、私なりのペースで楽しんでいきたいと思います。

多くの野鳥愛好家が鳥を通して自然を理解し、自然を大切に思う人が増えればと思います。

【記録された鳥】ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、カイツブリ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、バン、オオバン、タシギ、カモメ、ミサゴ、トビ、ハイタカ、ノスリ、カワセミ、アリスイ、アカゲラ、モズ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン

以上43種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、五十嵐優幸、井上公雄、大橋 晃、笠井好美、川東保憲・知子、川村宣子、川村政博・幸子、栗林宏三、香内 実、後藤義民、坂井伍一、潮見 諭、島田芳郎・陽子、杉本和矢、瀬川 睦、高橋貞夫、たかはしよしこ、田中志司子、田中洋行、田中 陽・雅子、戸津高保、蓮井 肇、早坂泰夫・みどり、樋口孝城・陽子、本間康裕、松原寛直・敏子、丸島道子、村上茂夫、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、渡会やよひ

以上41名

【担当幹事】坂井伍一、樋口孝城

宮 島 沼

2014. 4. 27

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、カリガネ、シジュウカラガン、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヒドリガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、カモメ、トビ、オジロワシ、オオタカ、ノスリ、アリスイ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ノビタキ、ハクセキレイ、カワラヒワ、アオジ

以上28種



宮島沼探鳥会風景 開始前の説明

【参加者】阿部真美、今村三枝子、白田 正、内山英晋、川東保憲・知子、北山政人、栗林宏三、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、佐藤ひろみ、潮見 諭、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、武田規子、田中 陽・雅子、戸津高保、中正憲信・弘子、中村 隆、蓮井 肇・敏恵、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、松原寛直・敏子、丸島道子、山本康裕 以上34名

【担当幹事】佐藤ひろみ、田中 陽

野 幌 森 林 公 園

2014. 4. 29

神奈川県横浜市・千葉県船橋市
高橋 弘行・瑞絵

4月29日に野幌森林公園で行われた探鳥会に神奈川県横浜市・千葉県船橋市から夫婦で参加させていただきました。当日は丁寧なご対応ありがとうございました。おかげさまで、ハシブトガラ、シマエナガを初めて観ることができました。ありがとうございました。

4月30日には、教えて頂いた苫小牧北大研究林・ウトナイ湖を訪れ、ハシブトガラ、ミヤマカケス、シロハラゴジュウカラ、イスカ、キバシリを観察することができました。加えて、思いがけず、ウトナイ湖ではオジロワシも出現しました。

5月1日には支笏湖野鳥の森を訪れ、水辺の観察小屋でヤブサメをつぶさに見ることができ、ミヤマカケス、シロハラゴジュウカラ、アカゲラ♂♀を身近に観ることができました。

GWの前半では北海道の夏鳥の観察には若干早すぎたのかもしれませんが、十分に楽しい鳥見旅となりました。そうそう、アオジの囀りも本州（関東）では囀る前に北国へ行ってしまうためになかなか聞けず、楽しい経験でした。是非また時期を見て北海道に鳥見に行きたいと思いました。

私たち夫婦で初めての北海道で、初見の鳥は以下の通りです。1. ハシブトガラ、2. 亜種シマエナガ、3. 亜種ミヤマカケス、4. 亜種シロハラゴジュウカラ、5. オジロワシ、6. キバシリ、7. イスカ。

その他に、エゾリス、シマリス、テン等も見ることができました（ヒゲマには会えませんでした、会えなくて良かった）。

最後になりましたが、北海道野鳥愛護会の皆様のご活躍をお祈りしてお礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、クイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、コマ

ドリ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、シメ、アオジ

以上31種

【参加者】阿部真美、井上公雄、今村三枝子、植木玲子、小島良介、小島惇子、小島俊幸、数田真弓、鎌田 洋、黒澤 大、小西美美枝、坂井伍一、佐藤 勉、佐藤美栄子、潮見 諭、志田静治、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、杉田範男、高橋貞夫、高橋弘行・瑞絵、田中香林、田中 陽・雅子、田守真一、田守敦子、竹内 強・麟太郎、徳田恵美、戸津高保、中正憲信・弘子、野田貴代子、畑 正輔、花谷 馨、花谷雅子、早坂泰夫、原田功雄、原 美保、藤田 潔、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、三井 茂、守谷ヨツ、矢木沢徳弘、矢木沢由美子、山本昌子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、渡部とも子 以上56名

【担当幹事】島田芳郎、横山加奈子

野 幌 森 林 公 園

2014. 5. 4

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、カイツブリ、キジバト、トビ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キバシリ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、イスカ、アオジ 以上24種

【参加者】井上公雄、今村三枝子、大賀 浩、小島俊幸・惇子、後藤義民、小西美美枝、品川睦生、清水朋子、瀬川 睦、高田征男、高橋利道、中正憲信、中村 隆、蓮井 肇、畑 正輔、広木朋子、辺見敦子、三井 茂、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、渡部とも子 以上23名

【担当幹事】後藤義民、畑 正輔

藤 の 沢

2014. 5. 6

【記録された鳥】マガモ、キジバト、アオサギ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、クイタダキ、ハシブトガラ、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、オオルリ、ニュウナイスズメ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、シメ、ホオジロ、アオジ 以上31種

【参加者】秋本秀人、荒木良一、石ヶ森久子、今村三枝子、北川博一、栗林宏三、小西峰夫・美美枝、小堀煌治、潮見 諭、品川睦生、高橋貞夫・芳子、田辺 至、戸津高保・以知子、野島美代子、畑 正輔、早坂泰夫、樋口 孝城・陽子、本間康裕、宮越洋子、矢嶋一昭 以上24名

【担当幹事】小堀煌治、品川睦生



【野幌森林公園】

2014年7月13日(日)、9月7日(日)
野幌森林公園も7月と9月とはそれぞれ異なる趣があります。大沢園地で昼食をとり、大沢口に戻るの
は午後1時ころになります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時
交 通：夕鉄バス 新札幌駅発(文京台南町行)大沢公園
入口下車 徒歩5分
JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)文京台
南町下車 徒歩5分

【石狩川河口】2014年8月24日(日)

秋の渡りのシーズンの前半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリを楽しみます。はまなすの丘公園ヴィジターセンターの前から浜に出て河口まで、河口からは石狩川に沿って戻ります。全部で4kmほどの行程になります。正午近くに駐車場に戻って鳥合わせをし、センター内などで自由に昼食をとることになります。

集 合：はまなすの丘公園ヴィジターセンター駐車場
午前9時30分
交 通：中央バス 札幌ターミナル発(石狩行) 終点
「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】2014年8月31日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリの観察が主目的です。天候次第ですが、人口干潟付近で鳥合わせをし、自由解散となります。「四季の館」に戻って館内ロビーで昼食をとられる方が大半です。館内には食堂や売店もあります。

集 合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時45分
交 通：道南バス 札幌駅前発または大谷地バスターミナル発(浦河行ベガス号)「四季の館前」下車

【いしかり調整池】2014年9月14日(日)

秋の渡りのシーズンに、いしかり調整池にやってくるシギ・チドリを主に観察します。また、水鳥たちを狙って猛禽類もやってきます。調整池の周りでの観察でほとんど移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気が良ければ管理棟の周りなどで昼食をとることになります。

集 合：いしかり調整池駐車場 午前9時30分
交 通：公共の交通機関はありません。

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。
☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465
午前10時～午後4時(土日、祝祭日を除く。)

鳥 民 だ よ り

◆本の紹介(北海道野鳥愛護会顧問 藤巻裕蔵)◆
ロシア極東鳥類目録. 1, 2, 3. V. A. Nechaev & T. V. Gamova, 藤巻裕蔵訳. 極東鳥類研究会.

「Birds of Russian Far East (An annotated catalogue)」
(2009、原文ロシア語)の翻訳である。ロシアのウラル山脈以東は大きく西シベリア、東シベリア、ロシア極東に区分されるが、その東部分の鳥類目録で、これまでに記録された557種について、和名、学名、ロシア名などのほか、種ごと、亜種がある場合には亜種ごとに極東における生息状況、繁殖分布域を記述している。また稀な種については具体的な記録も示されている。原書は1冊であるが、翻訳は出版の都合で3分冊となっており、全部で306頁である。ロシア極東は、南はウラジオストク周辺から北はカムチャツカ、チュコト半島までと、サハリン、千島列島を含み、日本列島とは日本海をはさんで隣の地域であり、とくに北海道に近い地域である。そのため、この目録には日本と同様に繁殖する種、冬日本に渡ってくる種など共通種が多く、興味深い内容である。札幌市内ではエコネットワーク(北区北9条西4丁目エルムビル8階)で販売している。

◆平成26年度野鳥写真展出展者・作品◆

入江 智一	カワアイサ(雄)、カワアイサ(雌)
内山 英晋	ダイサギ、ノビタキ
北川 博一	コミミズク、コマドリ
小堀 煌治	アオバト、ウン
佐伯 武美	シジュウカラ、ヒレンジャク
坂井 伍一	メジロ、アオシギ
漆崎 修	ハヤブサ、ビロードキンクロ
品川 睦生	ツツドリ(赤色型)、ヒレンジャク
高橋 良直	ミサゴ、キレンジャク
田中 陽	ギンザンマシコ、ミヤコドリ
中正 憲佑	オオマシコ、ツツドリ
蓮井 肇	アオシギ、キクイタダキ
早坂 泰夫	オオルリ、ハヤブサ
道川富美子	ツバメチドリ、オオジュリン
山田 甚一	オシドリ(幼鳥)、オシドリ(幼鳥)
吉中宏太郎	アカハラ、ヨシガモ
若松久二男	オオタカ、カッコウとノビタキ

以上17名 34点

【新しく会員になられた方々】

大澤美代子(札幌市白石区)
三宅 良夫・寛子(札幌市北区)
中田 達哉(江別市)
池長 裕史(福岡県久留米市)
田中 洋行(札幌市中央区)
大坪 和憲・ミヤ子(富良野市)
高橋 芳子(江別市)
片見 尚弘(札幌市中央区)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465
HPのアドレス <http://www.aigokai.org>